

# 童謡・唱歌歌唱時における方言アクセントの影響

## — 小学生と大学生による歌唱音声の音響分析から —

早川 倫子 ・ 大村 紗代\* ・ 鹿倉 由衣\*\*

本研究では、兵庫県と岡山県の小学生と大学生を対象に、童謡・唱歌の歌唱調査を行い、歌唱時における方言の影響の有無について検討した。調査にあたっては、小学校の学習指導要領に記載されている共通教材の中から《うみ》と《夕やけこやけ》の2曲を用い、歌詞朗読時と歌唱時の音声について録音し分析した。

歌詞朗読時の音声についての高低アクセントの判定の結果、兵庫県と岡山県のどちらの対象者においても方言アクセントで表現された箇所は少なく、共通語アクセント、または方言アクセント及び共通語アクセントのどちらとも異なるアクセントも見られた。次に、歌唱時の音声データをPRAATによって音響分析した結果、特に歌詞朗読時に方言アクセントの表れていた箇所において、ピッチおよびスペクトルに特徴的な動きを捉えることができた。また、歌唱時に方言の影響が現れやすいのは、歌詞朗読時の方言アクセントと旋律の動きの上行下行が対立している場合であることが明らかとなった。

Keywords : 童謡・唱歌, 歌唱, 方言の影響, 音響分析, PRAAT

### I. 問題の所在

歌しやすい歌というのは、歌詞のアクセントと旋律の上行下行が比較的一致していると考えられている(千田 2018)。全国で広く親しまれている童謡や唱歌の多くは、共通語のアクセントが旋律に反映されている(堤・平賀 2014)ものが多い。一方で、昔から遊びを伴って歌い継がれるわらべうたは、話しことばのアクセントがわらべうたの音声的特徴に反映されている。そのため、わらべうたは各地域の方言アクセントや音声的特徴で歌われるものもある(坂井 2002)。

平成29年告示『小学校学習指導要領』(2017)の音楽科において設定されている各学年4曲ずつ計24曲の歌唱共通教材においては、共通語アクセントが旋律に反映されているものが多く含まれている。そして、それらは全国の子どもたちが共通して

歌っていることは言うまでもない。

このような背景の中で、筆者らは、様々な地域の方言を持つ子どもたちが、当たり前歌っている共通教材の中で、特に共通語アクセントによって作られた文部省唱歌等に対して、違和感を持たずに歌っているのか素朴な疑問を持った。例えば、第1学年の共通教材《うみ》の最初の歌詞の「うみは」のところは、高→低へと旋律が順次下行している。一方で、関西圏<sup>1)</sup>の方言アクセントで言えば、「うみ」は低→高とアクセントが後について上行する。このように、旋律の高低の動きと話し言葉の方言アクセントとが異なる場合、違和感を持たずに歌うことができるのだろうか、また、同じ歌を歌っているように聴こえても、歌唱時にはそうした方言アクセントの影響が現れていないのだろうかと考えた。

そこで、本稿では、共通教材の中から共通語アクセ

岡山大学大学院教育学研究科 芸術教育学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

\*社会福祉法人 大久保保育園 674-0051 明石市大久保町大窪1865-7

\*\*Conductive Music CIC, Lewisham, London, United Kingdom

Influence of Dialect Accents on Singing Educational Songs – Acoustic Analysis for Singing Voices of Elementary School and University Students –

Rinko HAYAKAWA, Sayo OMURA\*, and Yui SHIKAKURA\*\*

Division of Art Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

\*Okubo Nursery School, 1865-1 Okubo, Okubo-cho, Akashi 674-0051

\*\*Conductive Music CIC, Lewisham, London, United Kingdom

セントで作曲されている童謡・唱歌<sup>2)</sup>を選曲し、歌唱時における方言アクセントの影響の有無について、兵庫県と岡山県の小学生と大学生を対象に実施した歌唱調査の結果について報告する。それぞれの対象者に対して、歌詞朗読時と歌唱時の音声を録音し、音響分析を行い、朗読時に見られる方言アクセントが、歌唱時にも影響を与えているかどうかを明らかにする。

## II. 童謡・唱歌の歌唱調査

### 1. 調査の対象と倫理的配慮

兵庫県の小学校に通う3年生34名(2020年9月11日に実施)、兵庫県出身の大学生10名(2020年5月～6月に依頼、7月に収集完了)、岡山県の小学校に通う3年生34名(2020年9月14日に実施)、岡山県出身の大学生10名(2020年5月～6月に依頼、7月に収集完了)を対象とした。小学生の学年については、両校の先生方と相談の結果、使用する楽曲2曲(共通教材《うみ》と《夕やけこやけ》)の学習時期や調査の方法を考慮し、3年生が最も適当であると判断した。なお、調査にあたっては、兵庫県及び岡山県の各協力小学校の校長及び担当教諭へ、また大学生については本人へ、研究の目的・方法を

説明し、承諾を得て実施した。また、小学生については無理をせずできる限り負担のないよう考慮した上で、感染症対策を施して録音を行った。氏名、性別、録画等、個人が特定される個人情報については収集していない。

## 2. 調査の内容と方法

### (1) 選曲について

楽曲は、『小学校学習指導要領』(2017)より、《うみ》(1番、2番)と《夕やけこやけ》(1番のみ)の2曲を用いた。《うみ》は第1学年、《夕やけこやけ》は第2学年の共通教材として指定されているものである。曲の長さや、歌詞のアクセントと旋律の一致率、調査可能な学年を考慮し、これらが適当であると判断した。小学生を対象とした調査A(以下、調査A)では1人につき1曲について録音し(兵庫:《うみ》19名、《夕やけこやけ》15名、岡山:《うみ》17名、《夕やけこやけ》17名)、大学生を対象とした調査B(以下、調査B)では1人につき2曲とも、録音を依頼した。以下の図1、図2は、千田(2018)、堤・平賀(2014)を参考に、歌詞の共通語アクセントと旋律の上行下行が完全一致の箇所には○、不一致の箇所には×を示したものである。

図1 《うみ》の旋律と歌詞の共通語アクセントとの関係(1番と2番)  
(教育芸術社『小学生のおんがく1』pp.26-27をもとに作成)

図2 《夕やけこやけ》の旋律と歌詞の共通語アクセントとの関係  
(教育芸術社『小学生の音楽2』pp.44-45をもとに作成)

(2) 音声の録音方法について

調査Aは、それぞれの小学校の一教室で実施した。1人ずつ教室に入ってきてもらい、録音をする形を取った。録音にはSONYのリニアPCMレコーダー(PCM-A10)を使用した。

調査Bは、対面で行うことが難しかったため、各自のスマートフォンで録音を行い、データを送ってもらう方法を取った。画面は仰向けの状態で、スマートフォン上部を口に向け、口の高さに合わせた位置に置いて録音を行ってもらった。録音内容と順番は、次の①～③のとおりである。

- ①歌詞を朗読する。
- ②無伴奏で歌唱する。
- ③もう一度、歌詞を朗読する。

なお、調査Aにおいては、ひらがなで表記した歌詞のみを用意し、それを見ながら①～③を行ってもらった。①、③の前には歌詞を示し「読んでください」と伝えた。また、②の前には歌詞を示し「歌ってください」と伝えた後に、旋律のはじめの1音(開始音)を鳴らした(兵庫県の小学校ではグランドピアノ、岡山県の小学校ではスマートフォンアプリピアノ for iPhoneを使用)。

Ⅲ. 分析と結果

1. 分析の方法

音声の分析を行うにあたって、全ての音声データの中から分析が可能なものを抽出した(《うみ》兵庫県小学生：7人／19人中、兵庫県大学生：10人／10人中、岡山県小学生：8人／17人中、岡山県大学生：10人／10人中。《夕やけこやけ》兵庫県小

学生：7人／15人中、兵庫県大学生：10人／10人中、岡山県小学生：6人／17人中、岡山県大学生：10人／10人中)。分析の対象から除いたデータは、歌を覚えきれておらず旋律が曖昧であったり、歌唱が朗読と同じようであったり、録音が不鮮明であったりしたものである。

抽出したデータのうち調査Bで得たデータについては、録音形式が様々であったため、ファイルコンバーター(Convertio)を使用し、mp4ファイルからwavファイルに変換した(調査Aのデータは録音時よりwavファイルで保存済み)。さらに、オーディオ編集用のフリーソフトウェアAudacityによって、調査A、調査Bのデータの音声ステレオからモノラルに変換した。

その後、1回目の朗読について、大村が音声聴取によってアクセントの高低を分析したのち、早川・鹿倉とともに再度聴取し、アクセントの高低を判定した。3名の判断が一致しない部分については、音声学における音声分析用のフリーソフトウェアPRAAT<sup>3)</sup>を使用してピッチを抽出し判定した。次に、1回目の朗読で方言アクセントがよく表れていたデータを抽出し、音声の音響分析を行った。音響分析については、上記のPRAATを使用して、音声波形、スペクトル、ピッチを抽出し、それらの特徴を比較した。

2. 分析結果

(1) 1回目の朗読におけるアクセントの分析

以下の表1～表4は、1回目の朗読における、文節ごとのアクセントの高低を聴取評価によって判定した結果を示したものである。堤・平賀(2014)を参考に、○はアクセントが高、●はアクセントが低

表1 《うみ》兵庫県 1回目朗読時のアクセント

●低○高	うみは	ひろいな	おおきいな	つきが	のぼるし	ひが	しずむ	うみは	おおなみ	あおい	なみ	ゆれて	どこまで	つつくやら
兵庫	●●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●● <sup>+</sup>	○●●	●●●	●●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●●
2	○●●	●●●●	○●●●	○●●	●●●	○●	●●●	○●●	●●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	●●●●
3	○●●	○●●●	●●●●	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●●
11	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●●
12	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●○
13	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●○
16	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●○
19	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●●	○●●○
A	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
B	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
C	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
D	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
E	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
F	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
G	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
H	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
I	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
J	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○
共通語	○●●	○●●○	○●●○	○●●	○●●	○●	○●●	○●●	○●●○	○●●	○●	○●●	○●●○	○●●○

表2 《うみ》岡山県 1回目朗読時のアクセント

●低○高	うみは	ひろいな	おおきいな	つきが	のぼるし	ひが	しずむ	うみは	おおなみ	あおい	なみ	ゆれて	どこまで	つづくやら
岡山	●●●	●●●●	●●●●●	●●●	●●●●	●○	●○○	●●●	●●●●	●●●	●○	●○○	○●●●	●○○●
1	○○○	●○○○	●○○○○	●●●	●●●●	○○	●○○	●●●	●●●●	●●●	●○	●○○	○●●●	●○○●
4	●●●	●●●●	●○○○○	●●●	●●●●	●○	●○○	●●●	●●●●	●●●	●○	●○○	○●●●	●○○●
6	○○○	○○○○	●○○○○	●●●	●●●●	○○	○○○	○○○	○○○○	○○○	○○	○○○	○●●●	●○○●
7	●●●	●●●●	○○○○●	●○○	●●●●	●○	●○○	●●●	●●●●	●●●	○○	●○○	○●●●	●○○●
8	○○○	●○○○	●○○○○	●●●	●●●●	●○	○○○	●●●	●●●●	●●●	○○	●○○	○●●●	●○○●
10	○○○	○○○○	●○○○○	●●●	●●●●	●○	●○○	○○○	○○○○	○○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
14	○○○	●○○○	●○○○○	●●●	●●●●	○○	●○○	○○○	●●●●	●●●	○○	●○○	○●●●	●○○●
17	○○○	●○○○	○○○○○	●●●	●●●●	●○	●○○	●●●	○○○○	●●●	○○	●○○	○●●●	●○○●
K	○○●	●○○●	●○○●●	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●	○○○○	●○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
L	○○○	●○○○	●○○○○	●○○	●○○○	○○	●○○	○○○	●●●●	○○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
M	●○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	○○	●○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	○○○●
N	○○○	○○○○	●○○○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○○	○○○○	○○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
O	○○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
P	○○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	●○	●○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	○○○●
Q	○○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	○○	●○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
R	○○○	●○○○	●○○●●	●○○	●○○○	●○	○○○	○○○	○○○○	●○○	○○	●○○	○●●●	●○○●
S	○○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○○	●●●●	○○○	○○	●○○	○●●●	○○○●
T	○○○	●○○○	○○○○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	○○○●
共通語	○○○	●○○○	●○○●●	●○○	●○○○	○○	●○○	○○○	●●●●	●○○	○○	●○○	○●●●	●○○●

表3 《夕やけこやけ》兵庫県 1回目朗読時のアクセント

○高●低	ゆうやけこやけで	ひが	くれて	やまの	おてらの	かねが	なる	おてて	つないで	みな	かえろ(う)	からすと	いっしょに	かえりましょう
兵庫	○○○○○○○○	○●*1	○○●	○●●	●○○●	○○○	○○	●○○	○○●●	○○	○○○	●●●○	●●●○	○○○○○○
21	○○○○○○○○●*2	○○	○○○	●○○	○○○●	○○○	●○	●○○	●●●●	○○	○○○	○●●●	●●●○	○○○●○x
22	○○○○○○○○●	●○	○○○	●○○	●○○○	●○○	○○	●○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○○○●
23	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	○○○●	●○○	●○	○○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○●●	○○○○●●
24	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	○○○○	○○○	●○	○○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○○○x
30	○○○○○○○○●*2	○○	○○○	○○○	○○○●	○○○	○○	●○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	○○●○	○○○●○●
33	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	●○	●○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○●○○
34	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	○○○●	○○○	●○	○○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○●○	○○○●○x
a	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	○○	●○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	●●●○	●●●○●
b	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	●○	○○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○○○○
c	○○○○○○○○○	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	○○	●○○	●●●○	○○	○○○	○●●●	●●●○	○○○○○●
d	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	○○	●○○	○○●○	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○○○●
e	○○○○○○○○○	○○	○○○	○○○	○○○○	○○○	●○	○○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	○○○○	●●●○●
f	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	○○○●	○○○	●○	●○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	●●●○	●●●○●
g	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	○○	●○○	○○○○	○○	○○○	○●●●	●●●○	○○○○○●
h	○○○○○○○○○	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	○○	○○○	○○●○	○○	○○○	○●●●	●●●○	○○○○○x
i	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	○○○●	○○○	○○	○○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○○○	○○○○○x
j	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	○○	●○○	○○●●	○○	○○○	○●●●	○○○○	●○○○○●
共通語	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	●○○○	○○○	●○	●○○	●○○○	○○	○○○	○●●●	●○○○	●○○○○●

\* 1 「ひ\い(が)」と拍内下行する。  
 \* 2 旋律に沿って歌唱するように聴き取れたものを指す。

表4：《夕やけこやけ》岡山県 1回目朗読時のアクセント

○高●低	ゆうやけこやけで	ひが	くれて	やまの	おてらの	かねが	なる	おてて	つないで	みな	かえろ(う)	からすと	いっしょに	かえりましょう
岡山	○○○○○○○○	●○	●○○	●○○	●○○○	●○○	○○	●○○	●○○○	●○	●○○	○○●●	●○○○	●○○○○●
18	○○○○○○○○●*1	○○	○○○	●○○	○○○●	○○○	●○	●○○	●●●●	○○	○○○	○○●●	○○●●	○○○●○x
20	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	○○○●	○○○	●○	○○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○●●	○○○○○●
21	○○○○○○○○●	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	●○○○○●
26	●●●●●●○○	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	●○○○○x
28	○○○○○○○○●	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	●○	●○○	○○●●	○○	○○○	○○●●	●○○○	○○○○○●
30	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	○○○●	●○○	●○	●○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	●○○○○●
k	○○○○○○○○●	○○	○○○	●○○	○○○●	○○○	○○	●○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	○○○○○x
l	○○○○○○○○●	○○	○○○	●○○	●○○○	○○○	●○	●○○	●●●○	○○	○○○	○○●●	●○○○	●●●○○x
m	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	○○○○	●○○	●○	○○○	●●●○	○○	○○○	○○●●	●○○○	●●●○○x
n	○○○○○○○○○	○○	○○○	○○○	○○○○	○○○	○○	○○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	●○○○○●
o	●●●●●●○○	○○	○○○	●○○	●○○○	○○○	○○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●●	○○●○	○○○○○●
p	○○○○○○○○●	○○	○○○	○○○	●○○○	○○○	●○	●○○	●●●○	○○	○○○	○○●●	○○●○	●○○○○●
q	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	●○○○	●○○	●○	●○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○●○	●○○○○●
r	●●●●●●○○	○○	○○○	○○○	●○○○	●○○	●○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●●	○○●○	●○○○○●
s	●●●●●●○○	○○	○○○	●○○	●○○○	○○○	○○	○○○	●●●○	○○	○○○	○○●●	○○●○	○○○○○x
t	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	○○○○	○○○	●○	●○○	○○○○	○○	○○○	○○●●	○○○○	○○○○○x
共通語	○○○○○○○○○	○○	○○○	●○○	●○○○	○○○	●○	●○○	●○○○	○○	○○○	○○●●	●○○○	●○○○○●

\* 1 旋律に沿って歌唱するように聴き取れたものを指す。

であることを示している(◎は○より高であることを示している)。各表一番左の列の「数字」番号は調査A(小学生)のデータ、「アルファベット」番号は調査B(大学生)のデータであることを示す。表の最上段には、兵庫県と岡山県それぞれの方言アクセントの基準を、一番下のセルには共通語アクセントを示した。これらは、『現代日本語方言大辞典』と兵庫県出身者と岡山県出身者それぞれ2名ずつへの聞き取り調査により判断したものである。

### ①《うみ》について

#### 【兵庫県の対象者の場合】

表1から、兵庫県の対象者の《うみ》の朗読には、以下の4点の特徴が見られた。

- ・ 「うみは」の部分について、方言アクセントは「う／み」であるのに対し、歌詞の1番の朗読では、全員が共通語アクセントと同じように「う\み」と発音している。そのうち2人は、歌詞の2番のみ方言アクセントと同じ「う／み」というアクセントである。
- ・ 「つきが」の部分について、方言アクセントは「つ\き」であるのに対し、17人中14人は共通語アクセントと同じ「つ／き」というアクセントである。
- ・ 「あおい」の部分について、方言アクセントは「あ\おい」であるのに対し、17人中14人は共通語アクセントと同じ「あ／お\い」というアクセントである。
- ・ 「のぼるし」の部分について、方言アクセントは「の\ぼる\し」であるのに対し、小学生7名全員が「の／ぼ\る(し)」と発音している。これは、共通語アクセント「の／ぼる\し」とも異なる。

#### 【岡山県の対象者の場合】

表2から、岡山県の対象者の《うみ》の朗読には、以下の4点の特徴が見られた。

- ・ 「うみは」の部分について、「うみ」の方言アクセントは共通語アクセントと一致している。そのため全員が「う\み」と下行している。
- ・ 「ひが」の部分について、岡山県の方言アクセント、共通語アクセントともに「ひ／が」であるのに対し、「ひが(高低変化なし)」が最も多く(18人中9人)、「ひ\が」が2人、「ひ／が」は7人である。
- ・ 「しずむ」の部分について、「しずむ(高低変化

なし)」である7人のうち、6人が「ひが」においても同様に高低変化なく発音している。

- ・ 全体的に、共通語アクセントと一致したアクセントであり、高低が逆のアクセントはあまり見られない。

以上のことから、《うみ》について兵庫県と岡山県を比較すると、兵庫県の方言アクセントは、《うみ》の1,2番において、共通語アクセントと全て異なる。一方で、『現代日本語方言大辞典』によると、岡山県の方言アクセントは共通語アクセントと同じである。したがって、兵庫県の対象者のほうが朗読時に方言アクセントが表れることを予測していたが、実際には方言アクセントはあまり表れていない結果となった。また、共通語アクセントとも異なるアクセントも見られ、全体的にばらつきが大きいことが読み取れる。これは、「歌詞を朗読する」という状況下であったため、上手に読もうといった意識が働いたためではないかとも考えられる。また、既習曲であることが影響していることも推察された。兵庫県と比較すると岡山県のほうがばらつきが小さいのは、共通語アクセントと方言アクセントが同じであることが要因と言える。

### ②《夕やけこやけ》について

#### 【兵庫県の対象者の場合】

次に表3から、兵庫県の対象者の《夕やけこやけ》の朗読には、以下の4点の特徴が見られた。

- ・ 「ひが」の部分について、方言アクセントは「ひ\い」と拍内下行するが、この特徴は1人も見られなかった。しかし、「ひ\が」と下行しているものを方言アクセントの表れであると判断すると、17人中9人に方言アクセントの表れが見られる。
- ・ 「くれて」の部分について、方言アクセントと同じ「く\れ(て)」であるのは、17人中10人である。その他「くれて(高低変化なし)」が4人、「くれ／て」が3人であり、どちらも共通語アクセントである「く／れて」とは異なる。
- ・ 「やまの」の部分について、方言アクセントと同じように「や\ま」と発音しているのは、17人中4人だけである。8人が「やま(高低変化なし)」,5人が共通語アクセントと同じ「や／ま」である。
- ・ 「からすと」の部分について、方言アクセントは「からす／と」であるのに対し、全員が共通語アクセントと同じように「か\らすと」と発



音している。

#### 【岡山県の対象者の場合】

表4から、岡山県の《夕やけこやけ》の朗読には以下の3点の特徴が見られた。

- ・ 「ひが」の部分について、方言アクセントと共通語アクセントともに「ひ／が」であるが、「ひ／が」と上行しているのは16人中5人しかおらず、「ひが（高低変化なし）」が7人、「ひ\が」が4人である。
- ・ 「くれて」の部分について、方言アクセント、共通語アクセントともに「く／れて」であるが、同じアクセントは1人もいなかった。「くれ／て」が16人中9人、「くれて（高低変化なし）」が7人である。
- ・ 「いっしょに」の部分について、方言アクセント及び共通語アクセントと同じ「い／っしょに」であるのは、16人中4人だけである。その他「いっしょ／に」が7人、「いっしょに（高低変化なし）」が3人、「い\っしょに」が2人である。

以上より、《夕やけこやけ》については、兵庫県と岡山県どちらもばらつきが大きいことが分かる。方言アクセントとも共通語アクセントとも異なるアクセントも見られた。また、朗読時に、冒頭の「ゆうやけこやけで」の部分を旋律に沿って歌う小学生も見られた。これは、「ゆうやけこやけ」等の言葉が、普段の話しことばとしてはあまり使うことのない言葉であるためではないかと推察される。また、《うみ》と同様、会話時とは異なり「朗読」を意識するため、方言アクセントが顕著に表れにくかったことも考えられる。

#### (2) PRAATを用いた音声の音響分析

##### ① 《うみ》について

《うみ》については、表1、表2より、1回目の朗読時において、「うみ」という単語に方言の特徴が表れていることが読み取れた。そのため、1番の「うみはひろいな おおきいな」と、2番の「うみはおおなみ あおい なみ」の「うみ」の部分に着目した。調査対象者の中でも全体的に方言がよく表れていると判断した兵庫県小学生3と兵庫県大学生C、岡山県小学生1と岡山県大学生Qのデータ（表1、表2においてグレーで示した）を抽出し、PRAATを用いて詳細な音響分析を行った。それぞれの朗読2回分と歌唱時の音声波形、スペクトル、ピッチを示したのが図3～図26である。縦軸は周波数（Hz）、横

軸は時間（sec.）を示し、周波数最大値の表示は8000Hzとしている。なお、小学生のデータは前述のレコーダーによる録音、大学生のデータは各自のスマートフォンによる録音であるため、音質には差が生じていることを記しておく。

#### 【兵庫県小学生3の場合】

図3～図8は兵庫県小学生3のデータである。朗読時を示す図3、図4、図7、図8においてスペクトルを見ると、基本周波数帯域から6400Hz帯域に高調波が集中している。また、文節の境界には無音区間が見られる。これは、提示した歌詞を文節ごとに区切って表記していたため、朗読時の表現に影響したと考えられる。朗読1回目を示す図3、図4のピッチを見ると、図3では「う\み」と下行しているのに対し、図4では「う／み」と上行している。表1からも、歌詞2番において方言アクセントで発音されていることが分かる。朗読2回目を示す図7、図8においても、同様に歌詞2番のみが「う／み」と上行しており、方言アクセントが表れていることが分かる。

一方で、歌唱時を示す図5、図6では、6400Hzから8000Hzまでの帯域にも高調波が観測される。また、図5、図6では、高調波を含め、全体的にスペクトルが観測され、さらに朗読時より音声も明瞭であることが分かる。「うみ」の部分に着目すると、図5に比べ、図6では「う」と「み」の間（点線で囲んだ部分）において、基本周波数帯域から8000Hz帯域までスペクトルが濃くなっており、音圧レベルが高くなっていることが分かる。また、ピッチにも動きが見られる。

以上から、兵庫県小学生3のデータにおいては、「うみ」の部分については、朗読時において2番のみ方言アクセントが表れていることを考慮すると、歌唱時における上記の特徴は方言アクセントの影響の表れではないかと考えられる。上行する方言アクセントに対し、旋律は下行するため、対立が生じて発

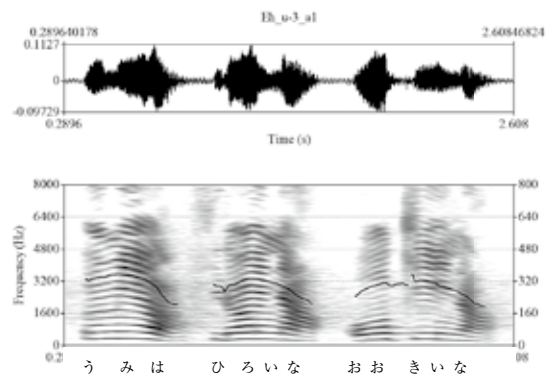


図3 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞1番 朗読(1回目)

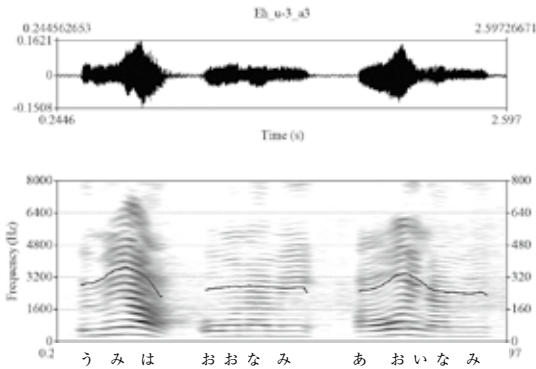


図4 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞2番 朗読(1回目)

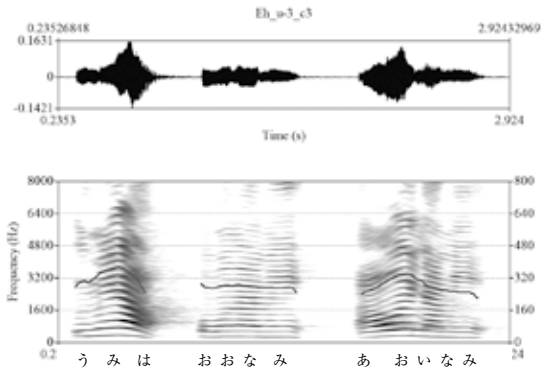


図8 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞2番 朗読(2回目)  
声において力が働いたのではないかと推察される。

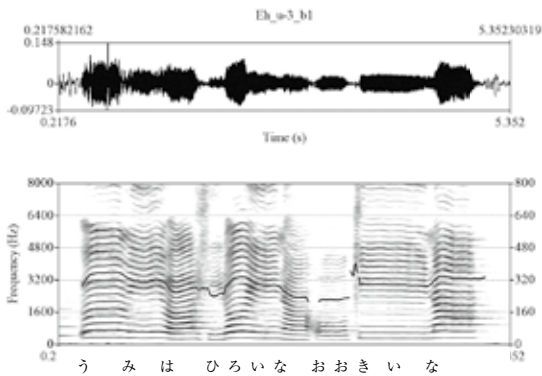


図5 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞1番 歌唱

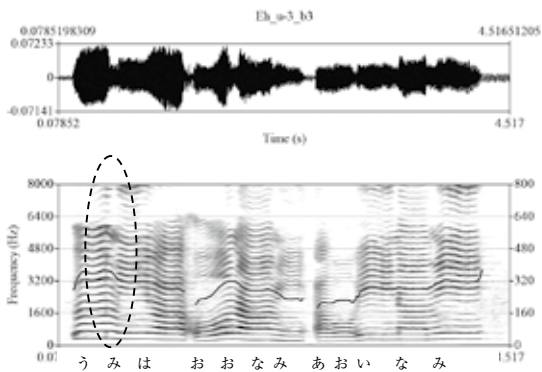


図6 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞2番 歌唱

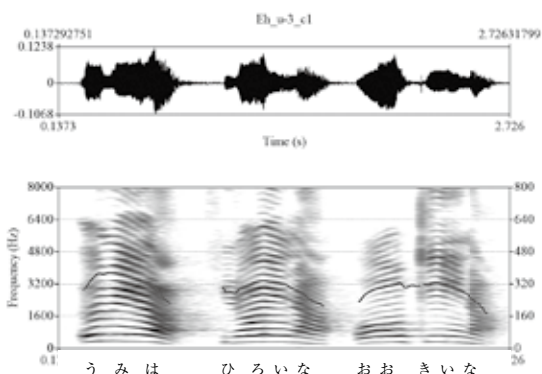


図7 兵庫県小学生3による《うみ》歌詞1番 朗読(2回目)

【兵庫県大学生Cの場合】

図9～図14は兵庫県大学生Cのデータである(なお、このデータは対象者自身でスマートフォンによって録音を行ってもらったものであり、背景雑音を確認される)。朗読時を示す図9、図10、図13、図14においてスペクトルを見ると、基本周波数帯域から4800Hz帯域に高調波が集中しており、4800Hzから8000Hz帯域ではスペクトルが安定していないことが分かる。また、文節の境界には無音区間が見られる。これは、提示した歌詞を文節ごとに区切って表記していたためであると考えられる。朗読1回目を示す図9、図10のピッチを見ると、図9では「う\み」と下行しているのに対し、図10では「う/み」と上行している。表1で示したとおり、歌詞2番のみ方言アクセントで発音されていることが分かる。一方、朗読2回目を示す図13、図14からは、歌詞の1番、2番どちらにおいても「う\み」と下行していることが分かる。

歌唱時を示す図11、図12では、基本周波数帯域から4800Hz帯域まで全体的にスペクトルが観測され、朗読時に比べて音声は明瞭であることが分かる。さらに「うみ」の部分に着目すると、図11に比べ、図13では「う」と「み」の間(点線で囲んだ部分)において、スペクトルに動きが見られる。また、ピッチにも同様に動きが見られる。

以上から、兵庫県大学生Cのデータにおいては、「うみ」の部分について、朗読1回目において2番のみ方言アクセントが表れていることを考慮すると、歌唱時における上記の特徴は方言アクセントの影響の表れではないかと考えられる。これについても、兵庫県小学生3と同様に、方言アクセント(「う/み」)に対して旋律は下行し、対立が生じるためではないかと推測することができる。朗読2回目では歌詞の1番、2番ともに方言アクセントが表れていないことに関しては、歌唱時の旋律が共通語アクセ

セント「う\み」と同じように下行していることから、直前の歌唱による影響を受けたためではないか

と推測する。

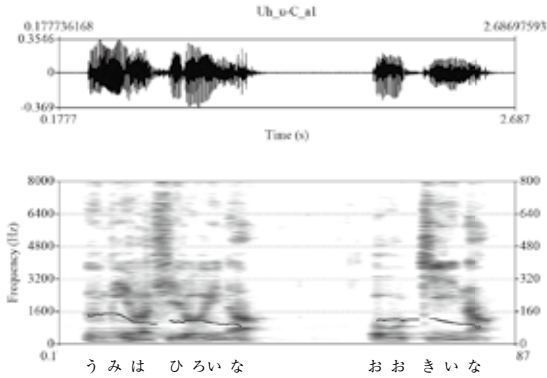


図9 兵庫県大学生Cによる《うみ》1番 朗読(1回目)

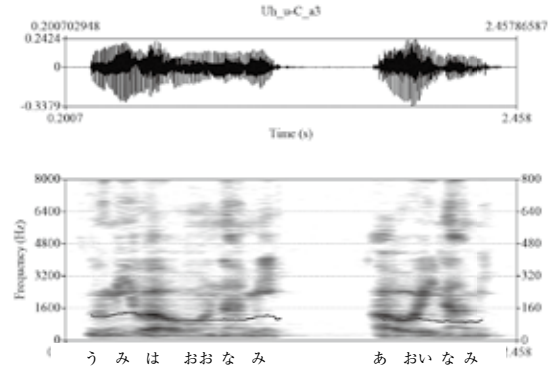


図10 兵庫県大学生Cによる《うみ》2番 朗読(1回目)

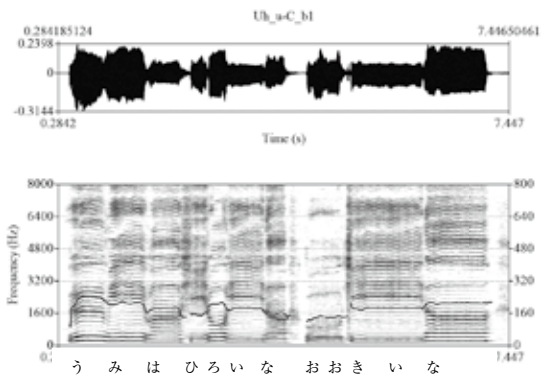


図11 兵庫県大学生Cによる《うみ》1番 歌唱

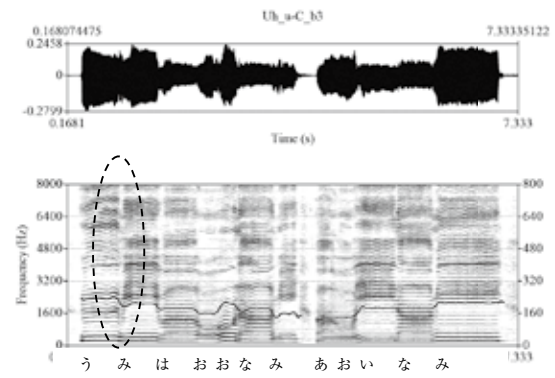


図12 兵庫県大学生Cによる《うみ》2番 歌唱

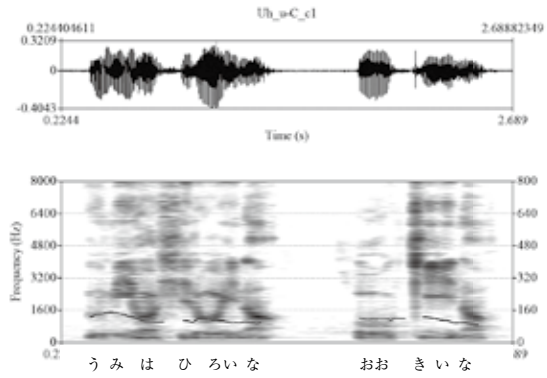


図13 兵庫県大学生Cによる《うみ》1番 朗読(2回目)

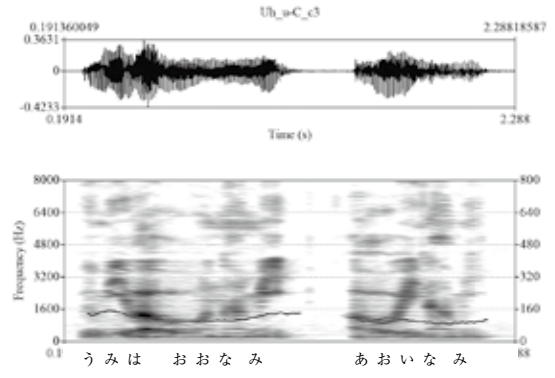


図14 兵庫県大学生Cによる《うみ》2番 朗読(2回目)

【岡山県小学生1の場合】

図15～図20は岡山県小学生1のデータである(なお、このデータは録音環境が整えられなかったため、背景雑音を確認される)。朗読時を示す図15、図16、図19、図20においてスペクトルを見ると、基本周波数帯域から1600Hz、3200Hzから4800Hz帯域に高調波が集中している。また、朗読1回目を示す図15、図16では、文節の境界に無音区間が見られる。これは、提示した歌詞を文節ごとに区切って表記していた影響ではないかと考えられる。一方で、朗読2回目を示す図19、図20を見ると、図15、図16に比べ、無音区間が狭いことが分かる。また、

朗読時を示す図15、図16、図19、図20においてピッチを見ると、「うみ」の部分はすべて「う\み」と下行しており、共通語アクセントと一致したアクセントであることが分かる。

歌唱時を示す図17、図18においても、基本周波数帯域から1600Hz、3200Hzから4800Hz帯域において全体的にスペクトルが観測され、さらに朗読時より明瞭であることが分かる。また、「うみ」の部分について着目すると、図17に比べ、図18では「う」と「み」の間(点線で囲んだ部分)において、ピッチに微細な動きが見られる。一方で、スペクトルには動きが見られない。また、図18において「あおい」



の部分では、スペクトル、ピッチともに特徴的な動きは見られない。

以上から、岡山県小学生1のデータにおいては、「うみ」の部分については、歌唱時において、歌詞の2番にのみピッチに微細な動きが見られたが、スペクトルには変化がなかった。さらに、朗読時のア

クセント（「う\み」）は、共通語アクセントと一致しており旋律も同様に下行しているため、対立は起こっていない。一方で、「あおい」の部分については、朗読時に表れている共通語アクセントと一致したアクセント（「あ／お\い」）と旋律（あお↑い）が対立しているにもかかわらず、その影響は表れていな

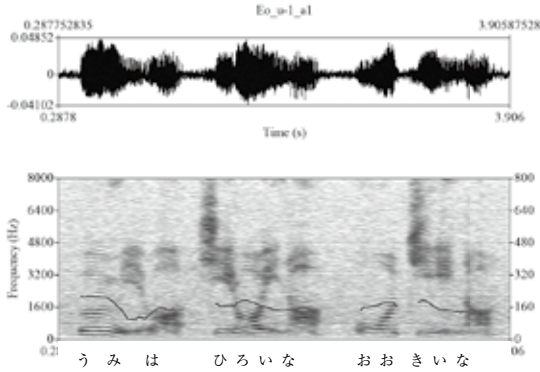


図15 岡山県小学生1による《うみ》1番 朗読(1回目)

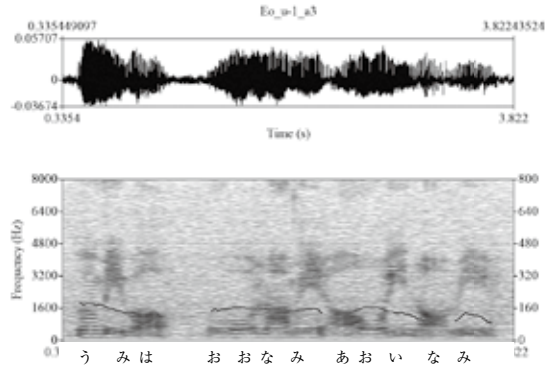


図16 岡山県小学生1による《うみ》2番 朗読(1回目)

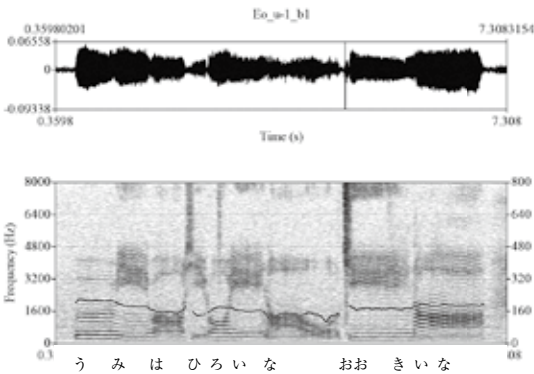


図17 岡山県小学生1による《うみ》1番 歌唱

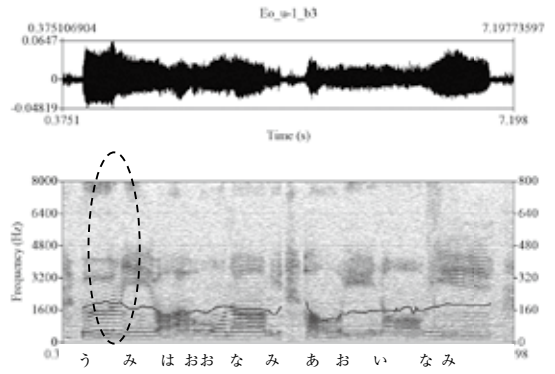


図18 岡山県小学生1による《うみ》2番 歌唱

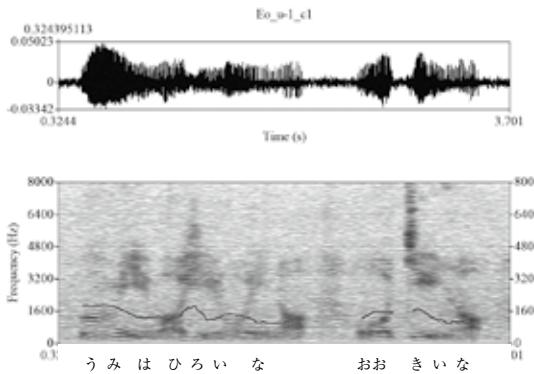


図19 岡山県小学生1による《うみ》1番 朗読(2回目)

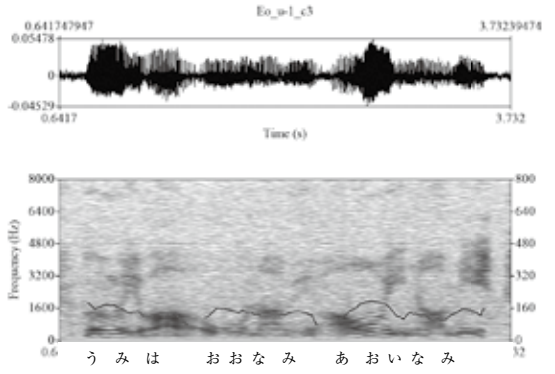


図20 岡山県小学生1による《うみ》2番 朗読(2回目)

い。

【岡山県大学生Qの場合】

図21～図26は岡山県大学生Qのデータである。朗読時を示す図21, 図22, 図25, 図26において、基本周波数帯域から3200Hz帯域に高調波が集中しており、3200Hzから6400Hz帯域ではスペクトルが

安定していないことが分かる。また、3200Hzから4800Hz帯域においては、一文字一文字の間に無音区間が観測される。聴取評価の結果、これは一文字ずつ区切るように発声しているためであることが認められた。ピッチを見ると、「うみ」の部分はすべて「う\み」と下行しており、共通語アクセントと一致したアクセントであることが分かる。

歌唱時を示す図23, 図24では, 基本周波数帯域から4800Hz帯域において全体的にスペクトルが観測され, 朗読時より明瞭であることが分かる。また, 音声波形においても, 振幅が大きく明瞭であることが分かる。一方で, 3200Hzから4800Hz帯域においては, 一文字一文字の間に無音区間が観測される。さらに, 「うみ」の部分について着目すると, スペクトル, ピッチともに特徴的な動きは見られない。また, 図24において「あおい」の部分についても, スペクトル, ピッチともに特徴的な動きは見られない。

以上から, 岡山県大学生Qのデータにおいては, 「うみ」の部分について, 共通語アクセントと一致したアクセント(「う\み」)で, 旋律の動き(う\み)が一致していることから, 対立が生じていない。そのため, 歌唱時において, 「うみ」の部分に方言アクセントの影響はないことがわかる。一方で, 「あおい」の部分については, 朗読時に表れている共通語アクセントと一致したアクセント(「あ\お\い」)と旋律(あお\い)が対立しているにもかかわらず, その影響は表れていないと考えられる。

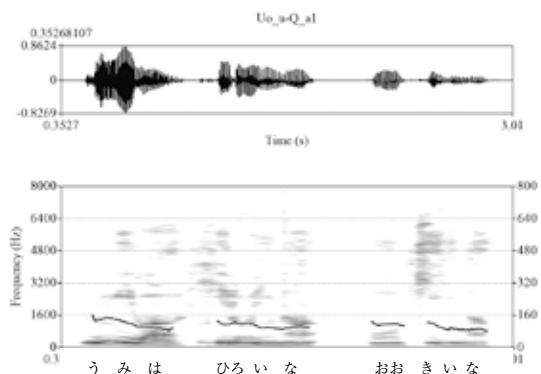


図21 岡山県大学生Qによる《うみ》1番 朗読(1回目)

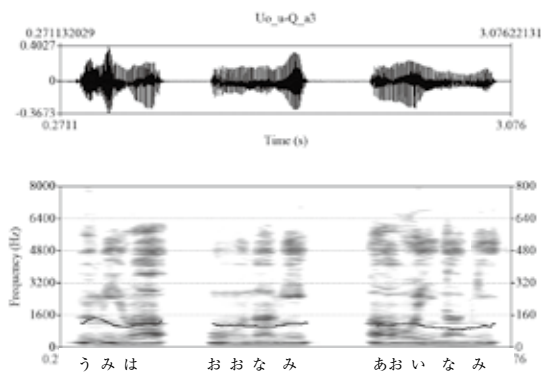


図22 岡山県大学生Qによる《うみ》2番 朗読(1回目)

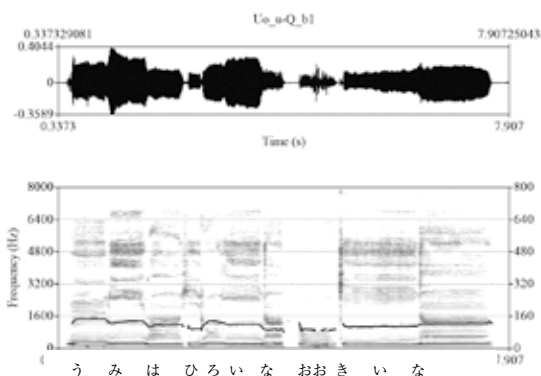


図23 岡山県大学生Qによる《うみ》1番 歌唱

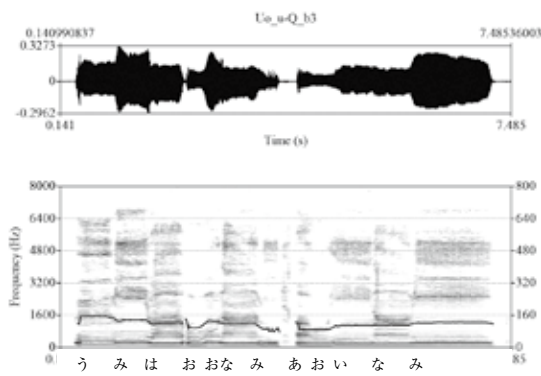


図24 岡山県大学生Qによる《うみ》2番 歌唱

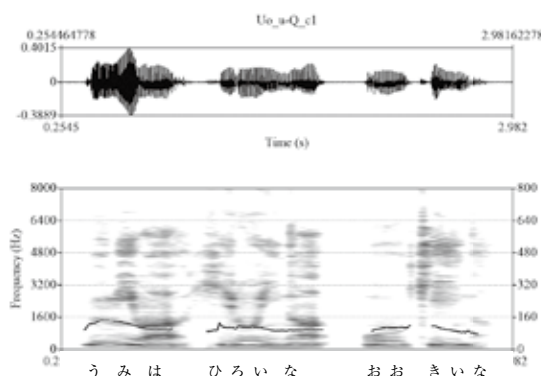


図25 岡山県大学生Qによる《うみ》1番 朗読(2回目)

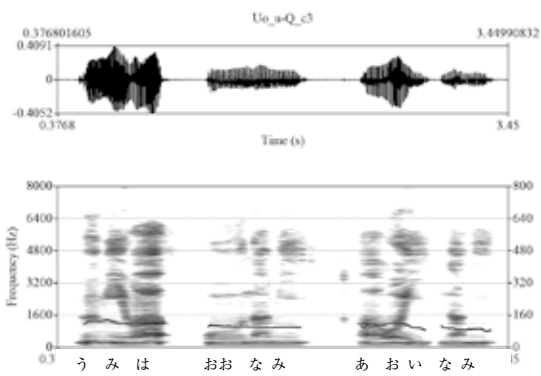


図26 岡山県大学生Qによる《うみ》2番 朗読(2回目)

② 《夕やけこやけ》について

《夕やけこやけ》については, 表3, 表4より, 1回目の朗読時において, 「ひがくれて」の部分に

方言の特徴が表れていることが読み取れた。そのため, 「ゆうやけこやけでひがくれて」の部分に着目した。調査対象者の中でも全体的に方言がよく表れ

ていると判断した兵庫県小学生33と兵庫県大学生h, 岡山県小学生26と岡山県大学生1のデータ(表3, 表4においてグレーで示した)を抽出し, 詳細な分析を行った。それぞれの朗読2回と歌唱時の音声波形, スペクトル, ピッチを示したのが図27～図38である。縦軸は周波数(Hz), 横軸は時間(sec.)を示し, 周波数最大値の表示は8000Hzとしている。なお, 《うみ》の場合と同様に, 小学生のデータは前述のレコーダーによる録音, 大学生のデータは各自のスマートフォンによる録音であるため, 音質には差が生じていることを記しておく。

#### 【兵庫県小学生33の場合】

図27～図29は兵庫県小学生33のデータである。朗読を示す図27, 図29においてスペクトルを見ると, 基本周波数帯域から6400Hz帯域に高調波が集中している。また, 音声波形を見ると, 朗読1回目に比べ, 2回目は音量が小さくなっていることが分かる。朗読1回目を示す図27のピッチを見ると, 「ひ\がく\れ(／て)」となっており, 表3で示したとおりの方言アクセントが表れていることが分かる。同様に, 朗読2回目を示す図29でも「ひ\がく\れ(／て)」となっているが, 図27と比較すると「ひが」の部分の高低差が大きくなっている。また, 図27に比べ, 図29では「ひ」の部分のスペクトルが濃くなっていることが確認できる。このことから, 朗読1回目より2回目のほうが, 方言アクセントが強くと推察される。

歌唱時を示す図28では, 基本周波数帯域から6400Hz帯域において全体的にスペクトルが観測され, 朗読時より明瞭であることが分かる。「ひが」の部分においては, ピッチ, スペクトルともに特徴的な動きは見られない。一方, 「くれて」の部分に着目すると, 「れ」の部分の6400Hzから8000Hzの帯域(点線で囲んだ部分)において, 高調波が観測される。しかし, ピッチには動きは見られない。

以上から, 兵庫県小学生33のデータにおいては, 「ひが」の部分については, 朗読時に方言アクセント(「ひ\が」)が表れているが, 歌唱時には方言アクセントの影響と考えられる動きは見られない。これは, 「ひが」の部分の旋律に高低変化がないためではないかと考えられる。また, 「くれて」の部分についても, 朗読時に表れている方言アクセント(「く\れ(て)」)と旋律(く\れ\て)が対立しているにもかかわらず, 歌唱時に方言アクセントの影響は表れていないと読み取れる。

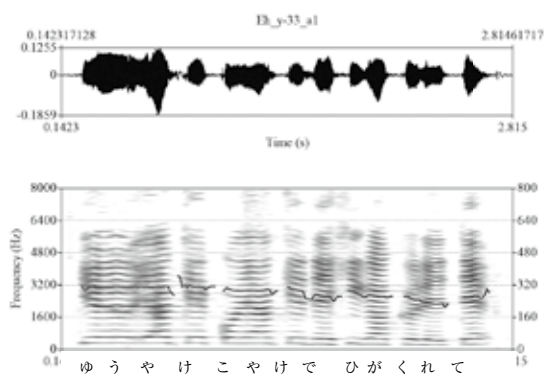


図27 兵庫県小学生33による《タヤケコヤケ》朗読(1回目)

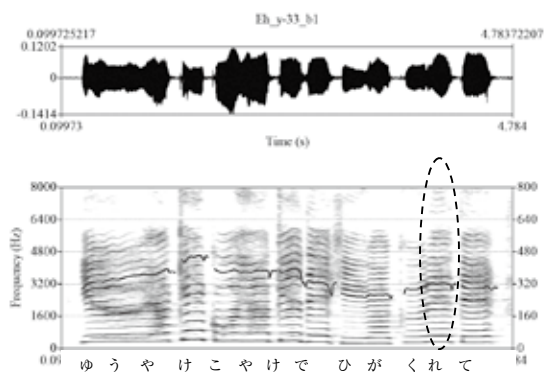


図28 兵庫県小学生33による《タヤケコヤケ》歌唱

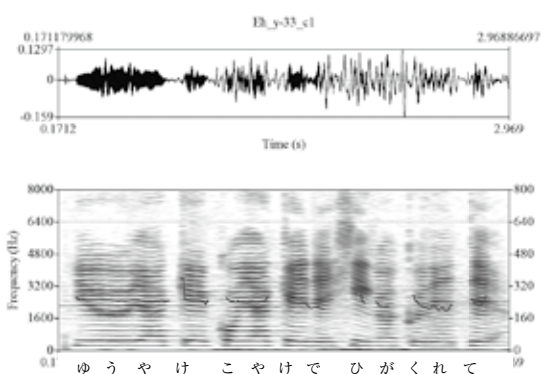


図29 兵庫県小学生33による《タヤケコヤケ》朗読(2回目)

#### 【兵庫県大学生hの場合】

図30～図32は兵庫県大学生hのデータである。朗読時を示す図30, 図32においてスペクトルを見ると, 基本周波数帯域から3200Hz帯域に高調波が集中しており, 3200Hzから8000Hz帯域ではスペクトルが安定していないことが分かる。また, 文節の境界に無音区間が見られる。これは, 提示する歌詞を文節ごとに区切って表記していたためであると考えられる。朗読1回目を示す図30のピッチを見ると, 「ひ\がく\れ(／て)」となっており, 表3で示したとおりの方言アクセントが表れていることが分かる。朗読2回目を示す図32からも, 同様に方言アクセントが表れていることが確認できる。しかし, 図30に比べ, 図32では「ひが」の部分の高低差が



小さくなっていることから、朗読2回目では方言アクセントが弱くなっていると考えられる。

歌唱時を示す図31では、基本周波数帯域から3200Hz帯域において全体的にスペクトルが観測され、朗読時より明瞭であることが分かる。「ひがくれて」の部分においては、スペクトル及びピッチに特徴的な動きは見られない。

以上から、兵庫県大学生hのデータにおいては、「ひが」の部分について、朗読時に方言アクセント（「ひゝが」）が表れているが、歌唱時には方言アクセントの影響と考えられる動きは見られない。これは、「ひが」の部分の旋律に高低変化がないためではないかと考えられる。また、「くれて」の部分については、朗読時に表れている方言アクセント（「くゝれ（／て）」と旋律（くゝれゝて）が対立しているにもかかわらず、歌唱時に方言アクセントの影響は表れていない。これらは、前述の兵庫県小学生33の結果と同じである。また、朗読2回目では「ひが」の部分の方言アクセントが弱くなっていることに関しては、歌唱時の旋律に高低変化がないことから、直前の歌唱による影響を受けたためではないかと推測する。

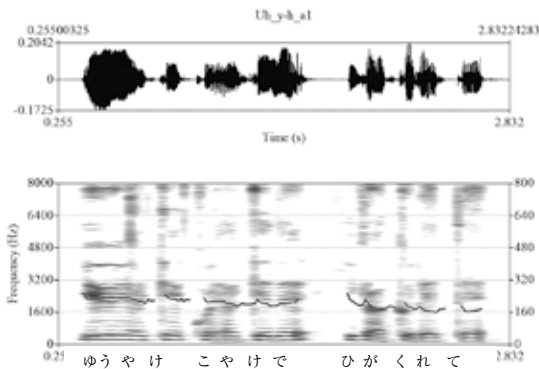


図30 兵庫県大学生hによる《夕やけこやけ》朗読(1回目)

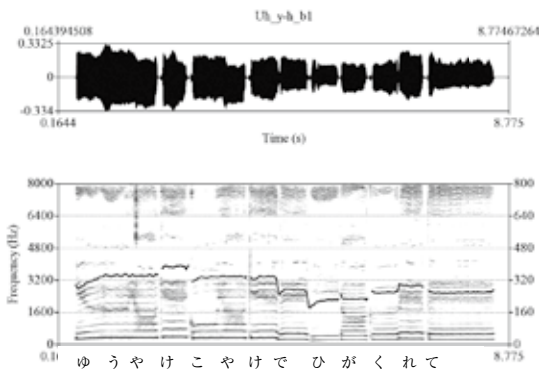


図31 兵庫県大学生hによる《夕やけこやけ》歌唱

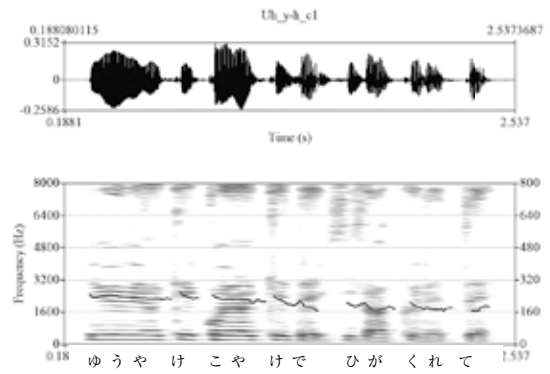


図32 兵庫県大学生hによる《夕やけこやけ》朗読(2回目)

【岡山県小学生26の場合】

図33～図35は岡山県小学生26のデータである(なお、このデータは録音環境が整えられなかったため、背景雑音を確認される)。朗読時を示す図33、図35においてスペクトルを見ると、基本周波数帯域から6400Hz帯域に高調波が集中している。朗読1回目を示す図33のピッチを見ると、表4で示したとおり、「ひ／がく（て）」となっており、「ひが」の部分は共通語アクセントと一致したアクセントが表れていることが分かる。一方で、「くれて」の部分は方言アクセントでも共通語アクセントでもなく、高低変化なく発音していることが分かる。朗読2回目を示す図35においても同様に、「ひが」の部分にのみ、共通語アクセントと一致したアクセントが表れていることが分かる。

歌唱時を示す図34では、朗読時と同様に、基本周波数帯域から6400Hz帯域に高調波が集中している。聴取からも、朗読時と歌唱時の発音が似ていることが確認できる。「ひがくれて」の部分においては、スペクトル及びピッチに特徴的な動きは見られない。

以上から、岡山県小学生26のデータにおいて、「ひが」の部分については、朗読時に共通語アクセントと一致した方言アクセント（「ひ／が」）が表れているが、歌唱時には方言アクセントの影響と考えられる動きは見られない。これは、「ひが」の部分の旋律に高低変化がないためではないかと考えられる。また、「くれて」の部分についても、歌唱時に方言アクセントの影響は表れていないことが認められる。



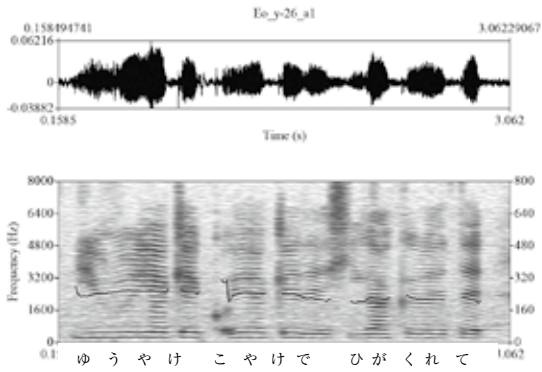


図33 岡山県小学生26による《タヤケコヤケ》 朗読(1回目)

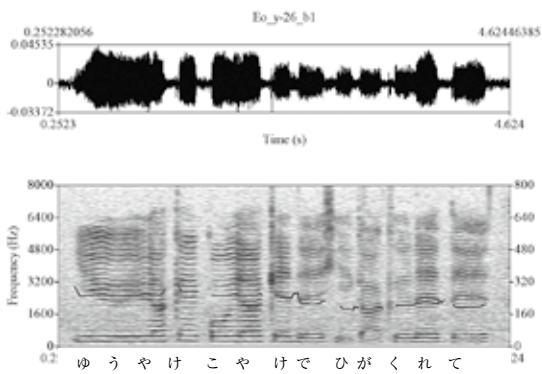


図34 岡山県小学生26による《タヤケコヤケ》 歌唱

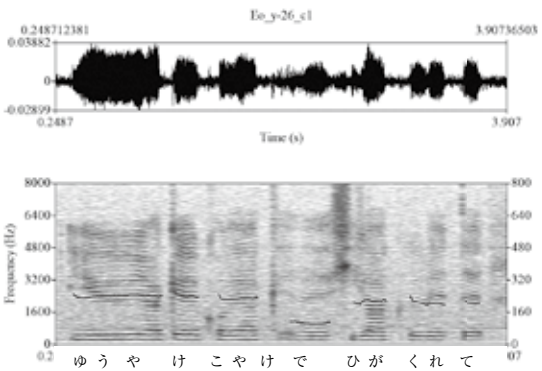


図35 岡山県小学生26による《タヤケコヤケ》 朗読(2回目)

【岡山県大学生1の場合】

図36～図38は岡山県大学生1のデータである(なお、このデータは、朗読1回目を示す図36の音声波形から読み取れるように、歌い始めから徐々に声が大きくなっている)。朗読時を示す図36、図38においてスペクトルを見ると、基本周波数帯域から4800Hz帯域まで高調波が集中しており、4800Hzから8000Hz帯域ではスペクトルが安定していないことが分かる。また、朗読1回目を示す図36のピッチを見ると、表4で示したとおり、わずかに「ひ／がくれ(／て)」となっている。「ひが」の部分は共通語アクセントと一致した方言アクセントが表れている一方で、「くれて」の部分は方言アクセントでも共通語アクセントでもなく、発音していること

が分かる。朗読2回目を示す図38においては、「ひがくれ(／て)」となっており、共通語アクセントと一致した方言アクセントとは異なることが分かる。

歌唱時を示す図37では、基本周波数帯域から4800Hz帯域および6400Hz～8000Hzの間において全体的にスペクトルが観測され、朗読時より明瞭であることが分かる。「ひがくれ」の部分においては、スペクトル及びピッチに特徴的な動きは見られない。

以上から、岡山県大学生1のデータにおいて、「ひが」の部分については、朗読時に共通語アクセントと一致した方言アクセント(「ひ／が」)が表れているが、歌唱時には方言アクセントの影響と考えられる動きは見られない。これは、「ひが」の部分の旋律に高低変化がないためではないかと考えられる。また、「くれて」の部分についても、歌唱時に方言アクセントの影響は表れていないと考えられる。朗読2回目では「ひが」の部分に方言アクセントが表れていないことに関しては、歌唱時の旋律に高低変化がないことから、直前の歌唱による影響を受けたためではないかと推察される。

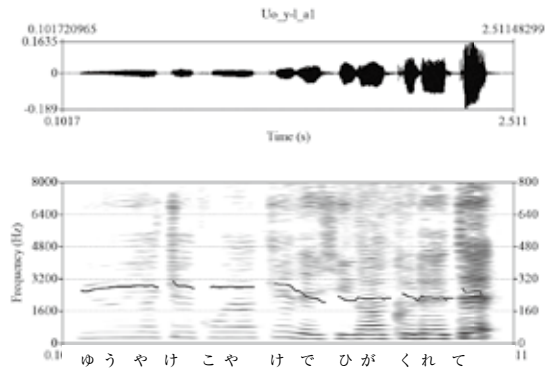


図36 岡山県大学生1による《タヤケコヤケ》 朗読(1回目)

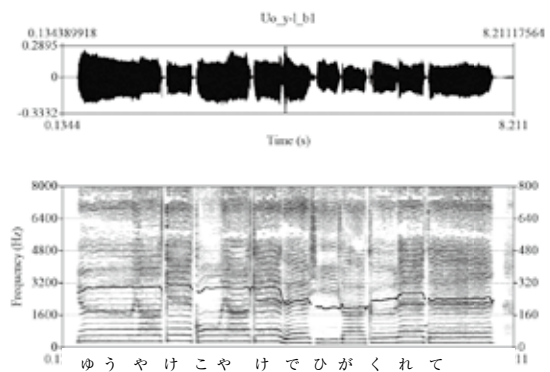


図37 岡山県大学生1による《タヤケコヤケ》 歌唱

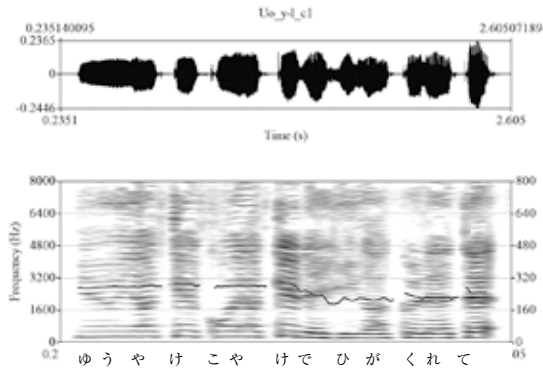


図38 岡山県大学生1による《夕やけこやけ》朗読(2回目)

#### IV. 総合考察

以上、本稿では、童謡・唱歌の歌唱調査及び音声分析を通して、童謡・唱歌歌唱時における方言の影響の有無について探ってきた。その結果、特に方言の影響が表れると考えられるのは、方言アクセントと旋律の上行下行が対立している場合であることが明らかとなった。特に共通語アクセントと異なる兵庫県の方言アクセントを持つ被験者に対して認められた。また、これらの結果は、音声聴取だけでは判断できなかったが、PRAATを用いた音響分析によって、朗読時及び歌唱時のスペクトルやピッチに微細な動きが見られたことにより、方言アクセントの影響と考えられる特徴を確認することができた。

一方で、方言アクセントと旋律の上行下行が対立しているにもかかわらず、旋律の表現に影響が見られない場合もあった。これには次の3点が関係していると考えられる。

1点目は、歌唱時には「歌を歌う」という意識が働くことである。童謡・唱歌の歌唱時と朗読時では声質が異なることが確認された。歌唱時には決まった旋律とリズムに従って「歌を歌う」という意識の上で発声するため、自然と方言のアクセントは制御されるためと考えられる。わらべうたのように、話しことばで且つ話し声の音域で歌うものとは異なり、さらに童謡・唱歌は多くの場合伴奏を伴うものであるため、「歌を歌う」という意識はより働きやすい。

2点目は、近年、話しことばの共通語化が見られることである。テレビやインターネットの普及によって共通語に触れることが多くなり、話しことばにおいても方言が薄れてきていることが考えられる。そのため、朗読時においても、方言アクセントではなく共通語アクセントで発音されている部分が多く見られた。この点については、本調査では、小学生と大学生のみが調査対象であったため、より上の年齢層を対象とした場合には、もう少し異なる結

果となる可能性があるのではないかと考える。

3点目は、ことばや旋律によって、方言が表れやすいものと表れにくいものがあることである。普段の会話時によく用いられることばであるかどうかが必要因の一つではないかと推測する。本研究において分析を行った2曲については、《うみ》にのみ方言の影響と考えられる特徴が捉えられた。《うみ》の歌詞中の「海」、「広い」、「大きい」などは、普段の会話時にもよく用いられることばであるが、《夕やけこやけ》の歌詞中の「夕やけこやけ」、「日が暮れて」などは、あまり用いられないことばであるためではないかと考えられる。この結果は、田中・坂井(2002)のわらべうたと方言の関係性についての研究において、方言アクセントが旋律の動きに反映されやすいことばと、あまり反映されないことばがあるという結論と重なる部分がある。本研究では調査に用いた楽曲数が少ないため、明確な結論を導くことはできなかったが、旋律の動きに方言アクセントが表れやすいものと表れにくいものについても、ことばの種類や内容によって何らかの規則性が出てくる可能性があるのではないかと考える。

これらのことから、歌詞の共通語アクセントに忠実に旋律がつくられた童謡・唱歌の歌唱時においては、特に「歌を歌う」という意識が働くことと、話しことばではない歌詞を歌うという点から、方言の影響はあまり大きくないということが考えられた。しかし、対象者の方言の強さや歌唱時の意識、歌詞に用いられていることばによっては、方言の影響が表れる場合があるのではないかと推察される。また、今回は一人ずつの調査であったため、全体で共に声を合わせて歌う場合はどのような傾向が見られるのか課題が残る。今後は、調査対象の楽曲数や年代の幅や歌唱形態の違い等の条件を再考し、さらには歌った時の感想や旋律とことばの視点からの歌いやすさ・歌いにくさの要因についても調査し、研究を深めていきたいと考える。

#### 謝辞

本研究を実施するにあたりご協力くださいました先生方、児童の皆さんと大学生の協力者の皆さんに深く感謝申し上げます。

#### 付記

本稿は、2020年度岡山大学教育学部学校教員養成課程小学校コースに提出した大村紗代の卒業論文の内容の一部を、早川・大村・鹿倉とともに加筆修正し再構成したものである。なお、主としてデータ収集・データの第1次解析は大村、音声の聴取評価

については早川・大村・鹿倉, PRAATを用いたデータの解析結果の評価は鹿倉が担当した。

#### 注

- 1) 関西圏の中でも様々な方言アクセントがあり、京都アクセントや京阪アクセントと呼ばれるもの等がある。今回の調査は主として兵庫県の方言アクセントを対象としている。
- 2) 共通教材の中には、童謡、唱歌、わらべうた、日本古謡などのジャンルの歌が含まれているが、今回は文部省唱歌の《うみ》と童謡に分類されると言われている《夕やけこやけ》を選曲しているため、童謡・唱歌と表記した。
- 3) アムステルダム大学のPaul BoersmaとDavid Weeninkの両名を中心として開発されたもの(公式ホームページ<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>)。

#### 引用・参考文献

- 秋永一枝(編)(2001)『新明解 日本語アクセント辞典』三省堂
- 教育芸術社(2019)『小学生のおんがく1』
- 教育芸術社(2019)『小学生の音楽2』
- 坂井康子(2002)「幼児の発話と歌唱における方言アクセントと共通語アクセント」『人間科学研究』Vol.10, No.1, pp.65-75
- 鹿倉由衣・志村洋子・市川恵(2017)「音声分析勉

- 強会 - Praatによる音声の分析方法を学ぶ -」日本音楽教育学会夏季ワークショップ発表資料
- 千田耕太郎(2018)「童謡における詞のアクセントと旋律との関係についての一考察 ~不一致個所から作曲者の意図を図る~」『四條畷学園短期大学紀要』No.51, pp.19-26
- 田中喬子・坂井康子(2002)「幼児の歌唱行動に関する一考察」『京都教育大学紀要』No.101, pp.19-35
- 堤彩香・平賀譲(2014)「日本語の音韻と旋律の関係について ~童謡・唱歌を中心に~」『情報処理学会研究報告』Vol.2014-DCC-8, No.5, pp.1-6
- 平山輝男(編)(1992-1993)『現代日本語方言大辞典』第1-6巻, 明治書院
- 峯松信明「音声の音響分析の「いろは」~初めて音声波形を見る方へ~」『日本音声学会音声学普及委員会』スライド資料<https://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/~mine/japanese/acoustics/lecture-02.pdf> (2021/09/01最終参照)
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領(平成29年告示)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/on.htm), (2021/08/31最終参照)
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版社
- PRAAT公式ホームページ<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> (2021/09/01最終参照)